

温かな思いを 一針に込めて

衣類の傷や穴を修復する技術のかけはぎ。

思い入れある服をこれからも身に着けられるように

一針一針、職人が丁寧に手作業を施す。

上社に店を構える、かけはぎ工芸 織本は

人々の大切な衣服を長く保つため

親子3代にわたって技術を受け継いでいる。

親子の情熱で営まる 創業31年のかけはぎ専門店

昭和37年、東区でひとりの青年がかけはぎ専門店の看板を上げた。店主は当時20歳の松本孝夫さん。高校卒業後、市内の職人のもとで修業を終えたばかりのかけはぎ職人である。

店は順調に進み、孝夫さんの精巧な技術は評判を呼んだ。その姿を側で見ていた息子の文孝さんは、高校在学中に父と同じ道を志し、修業に入った。

朝6時から夜9時まで生地に向

かう日々。文孝さんはめきめきと腕を上げ、作業の速さは他の職人を抜いた。その上達ぶりは、修業を始めて1年で「そんないく早く織つて見えてるのか」と孝夫さんに言われたほどで、親子は切磋琢磨して日々腕を磨いた。

昭和61年、文孝さんは独立し、上社で「かけはぎ工芸 織本」を創業。父・孝夫さんが店を興したのと同じ20歳のことだった。

現在、上社の名古屋店のほか、全国で4店舗を開業。文孝さんの息子である剛磨さんもかけはぎ職人の道を選び、店を支える中心的存在だ。

東京方面ではかけはぎと言われる一方、関西方面ではかけつきと言われる。かけはぎ工芸 織本では看板に両方を表記している。



在になった。日々技術の研鑽が積まれ、親子3代にわたって受け継がれる職人の魂と技術の追求に終わりはない。

**生地の織り方に合わせ
手作業で施す修復技術**

かけはぎには主に2種類の技法がある。共布で傷や穴を覆い、織り方の通りに糸を入れ込む「刺し込み式」と、生地の糸を用いて織り方の見極められた「織り込み式」だ。どちらも裾の折り返しなどから糸や生地を取るために、衣服の見た目に影響がない。一般的に、傷の店は少ないため、傷の大ささや生地の

種類によって技法を変え、より綺麗な仕上がりを目指すのが織本の特徴でもある。

かけはぎは、元の生地の柄などを再現可能だが、高度な技術が必要。「職人はあらゆる生地の織り方を頭に入れておかねばなりません。初めて触れる生地や複雑な織り方の生地などは、作業に何時間もかかる場合もあります。職人は長年の経験により、その生地をもつとも綺麗に直すためのベストな方法を判断して作業にあたります」と剛磨さんは熱を込める。

近年、ニット類やウールのダウ

「生地を職人の目で実際に見てみないと修復できるか分からないものも多いです。まずは衣服を見せていただいて判断する場合もあります」遠方から宅配で送る人や、何年同じ衣服の修復を依頼する常連

1_衣類にできた小さな穴の周辺を固定して、縦糸と横糸を織り込む「織り込み式」。店名の「織本」は、代々松本家が織り込みを業としてきたことから付けられた。2_道具は職人の命。生地の織り方を見極めるための眼鏡や小さな針は、かけはぎのために作られたもの。3_傷を覆うようにして生地をはめ込む。「差し込み式」。一般的に、かけはぎはこの技法を指す

かう日々。文孝さんはめきめきと腕を上げ、作業の速さは他の職人を抜いた。その上達ぶりは、修業を始めて1年で「そんないく早く織つて見えてるのか」と孝夫さんに言われたほどで、親子は切磋琢磨して日々腕を磨いた。

昭和61年、文孝さんは独立し、上社で「かけはぎ工芸 織本」を創業。父・孝夫さんが店を興したのと同じ20歳のことだった。

現在、上社の名古屋店のほか、全国で4店舗を開業。文孝さんの息子である剛磨さんもかけはぎ職人の道を選び、店を支える中心的存在だ。

東京方面ではかけはぎと言われる一方、関西方面ではかけつきと言われる。かけはぎ工芸 織本では看板に両方を表記している。

かう日々。文孝さんはめきめきと腕を上げ、作業の速さは他の職人を抜いた。その上達ぶりは、修業を始めて1年で「そんないく早く織つて見えてるのか」と孝夫さんに言われたほどで、親子は切磋琢磨して日々腕を磨いた。

昭和61年、文孝さんは独立し、上社で「かけはぎ工芸 織本」を創業。父・孝夫さんが店を興したのと同じ20歳のことだった。

現在、上社の名古屋店のほか、全国で4店舗を開業。文孝さんの息子である剛磨さんもかけはぎ職人の道を選び、店を支える中心的存在だ。

東京方面ではかけはぎと言われる一方、関西方面ではかけつきと言われる。かけはぎ工芸 織本では看板に両方を表記している。

かう日々。文孝さんはめきめきと腕を上げ、作業の速さは他の職人を抜いた。その上達ぶりは、修業を始めて1年で「そんないく早く織つて見えてるのか」と孝夫さんにと言われたほどで、親子は切磋琢磨して日々腕を磨いた。

昭和61年、文孝さんは独立し、上社で「かけはぎ工芸 織本」を創業。父・孝夫さんが店を興したのと同じ20歳のことだった。

現在、上社の名古屋店のほか、全国で4店舗を開業。文孝さんの息子である剛磨さんもかけはぎ職人の道を選び、店を支える中心的存在だ。

東京方面ではかけはぎと言われる一方、関西方面ではかけつきと言われる